木版画のこと、いろいろ教えてください！

絵師、彫師、摺師による分業で作られる木版画。今回は、木版画彫師(彫師)の阿部さんと木版画摺師(摺師)の小川さんの作業を見学させてもらいました。また、小川さんの指導のもと、木版画摺りの体験をしました。果たして上手に摺れたのでしょうか？

▲彫師が使う道具には、いろいろな種類の彫刻刀や木槌があります

▲彫師が彫った板は、版木と呼ばれます。この版木は阿部さんの親方の関岡さんが作ってくれた、彫り手順の見本です

▲小川さんのバレンは親方の川嶋さんから受け継いだもの。バレン専門の職人さんは日本で一人しか残っていないそうです

まずは▼▼▼ 見学

阿部さんのお仕事を見てみよう！

絵師が墨で描いた下絵を使って版木を彫るのが彫師の仕事です。最初にでんぷんのりを版木に乗せ、手で伸ばしてから下絵を版木に貼ります。次に、墨線が見えやすくなるように、のりが乾ききる前に紙を少し湿らせながらこすり、下絵の紙を薄い皮一枚の状態にします。さらに油を薄く塗り、より見えやすくしてから彫り始めます。多くの木版画は多色摺りで、色ごとに版木を作ります。

◀伝統工芸の木版画には、粘りがあり堅いヤマザクラの木を使います。見本で見せてもらった作品には７色が使われていて、彫り終わるまで約１週間かかるそうです

◀切り出し刀という、刃先が斜めの彫刻刀で、墨線の両側を彫ります。「彫師は、どの角度からでも彫れるように練習しているので、板をなるべく動かさずに手首を回して彫ります」と語る阿部さん

阿部紗弓さんはこんな人

平成28年１月から荒川の匠育成事業(荒川区伝統工芸技術継承者育成支援事業)に参加。関岡裕介氏(三代目関岡扇令、荒川区登録無形文化財保持者)のもとで修業後、独立。

どうして職人の道を選んだのですか？

「私は神奈川県鎌倉市生まれなので、幼いころから鎌倉彫りが身近にあり、木に馴染みがありました。将来は手に職をつけたいと思い、ものづくりが学べる専門学校へ進学しました。その後、荒川区で職人になりたい人を募集していることを知り、木版画の彫師の親方へ弟子入りしました」

◀彫師の仕事の魅力を聞くと「細かい絵を黙々と彫ることにやりがいを感じます。今回の取材を通して、木版画をもっと身近に感じてもらえたら」と答えてくれました

どうして職人の道を選んだのですか？

「ひいおじいちゃんの代から版画の摺師をしていたので、生まれたときから木版画は身近なものでした。大学卒業後は一般の会社に就職しましたが、一人っ子なので自分が継がなければ伝統が途絶えてしまうし、やっぱり摺師の仕事を継承したいと思い、24歳のときに職人になることを決めました」

◀「職人はプロスポーツ選手と同じで直接結果が返ってくる」と小川さん。厳しい世界だけど、結果が見えやすいのがやりがいだと話してくれました

小川さんのお仕事を見てみよう！

彫師が彫った版木に色を摺り重ねて、作品を完成させるのが摺師の仕事です。版木の上に絵の具を置き、刷毛で薄く広げたあとに紙を乗せます。その後、バレンで摺って色をつけます。１色ずつ摺るため、７色を使う作品の場合は７回摺る作業を行います。グラデーション(ぼかし)や濃淡の表現にも、摺師の伝統的な技法が使われています。

◀小川さんが摺りのお手本を披露。今回の体験では１種類ですが、普段は作品に合わせて３～４種類のバレンを使い分けます

◀彫師が目印として付けた“見当”に合わせて、ずれないように紙を置きます。「見当を付ける」の由来といわれています

小川信人さんはこんな人

平成27年４月～令和２年３月まで荒川の匠育成事業に参加。祖父・関岡功夫氏(二代目関岡扇令、荒川区指定無形文化財保持者)の弟子・川嶋秀勝氏(荒川区指定無形文化財保持者)のもとで修業し、現在は親方と同じ工房で活躍中。

作品を見てみよう！

ジュニア記者たちは「少ない色でこんなに細かい表現ができるのがすごい！」と感動

▶主に明治、大正ごろに制作された木版画。江戸時代の木版画に比べ、絵のタッチや色彩に、西洋の要素が採り入れられています

現代版画

▶江戸時代の流行などを描いた多色摺りの版画。錦絵ともいい、風景画・役者絵など、江戸の人々に広く受け入れられて大流行しました

浮世絵

千社札

▲手彫と手摺で仕上げられた交換札。江戸時代から始まった愛好家たちによる交換会は、今でも定期的に行われています

そして▼▼▼ 体験

ハガキにカエルの絵を摺ってみよう！

いよいよジュニア記者が摺師の仕事体験に挑戦！ 今回は４色の絵の具を使って、ハガキにカエルの絵を摺ります。ハガキは、和紙とは違って水分を含んで膨張する心配がないので、初心者にはおすすめ。どんな作品が完成するかな？

▶小川さんからジュニア記者へ「平行に摺ると色がきれいにつきやすい」とアドバイス。手首に負担がかからないよう、摺師が使う作業台は斜めに傾いています

1色目

▲まず初めに黒の絵の具を摺ります。カエルの輪郭が出てきました

2色目

▲２色目の茶色を摺ると、お腹のあたりに色がつきます

3色目

▲緑の絵の具にのりを混ぜて粘りけを出して摺り、ペタッとした質感を出します

4色目

▲最後に薄い緑色を摺ります。淡い色を出すときは、絵の具にのりを混ぜません

完成

▲４色で摺った、繊細でリアルなカエルが完成しました。今にも動き出しそう！

ジュニア記者が木版画摺りに挑戦

◀トップバッターは大井さん。緊張しながらも、一つひとつ丁寧に作業を進めます

▶４回とも同じ位置で摺らなければ絵柄がずれてしまうので、慎重に。力を抜き、バレンをくるくると動かして摺ります

▲「初めてとは思えないくらい手際がいい。最後までしっかり摺ってね」と褒められました

▲両手をチョキの状態にしてハガキを挟んで持ち、ずれないように親指を添えて板に置きます。これがなかなか難しい！

▶色をつけるための絵の具は顔料といい、鉱石や植物などの自然素材からできています。最近は人工顔料も使われます

令和５年度「はばたけ！ 若手職人展」

荒川の匠育成事業の修了者・研修者による伝統工芸品を紹介します。阿部さん・小川さんの作品も展示されるので、ぜひ、見に行ってみよう！

●日時：４月14日(金)～６月７日(水)
●会場：荒川ふるさと文化館
あらかわ伝統工芸ギャラリー
●観覧料：無料

上手にできました

▶「学校で習った版画とは違って、作品の完成までには長い時間と手間がかかっていてすごいなと思いました。色のつけ方も実際にやってみると難しかったし、伝統工芸技術は奥が深いです」(佐倉 凪さん)

▶「１回摺るたびに作品がどんどん出来上がっていくのが楽しくて、やりがいを感じました。今日教えてもらったことを、図工の時間などに役立てられたらいいなと思います」(大井 悠里さん)

▶「バレンなどの道具が自然素材からできているとは知らなかったので、驚きました。見ているときは自分にもできそうと思ったけど、実際にやってみると難しかった。でも楽しかったです」(松永 凪央さん)

▶「工程を覚えるのが大変で、次は何をするんだっけ？ と確認しながら作業を進めました。絵の具を刷毛で混ぜるのを忘れたときは焦ったけど、とてもいい経験ができました」(山本 和輝さん)